

新技術 解説

日本産チャバネアオカメムシ類の最新の分類

東京農業大学 農学部 生物資源開発学科 いし石 かわ川 ただし忠
 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 もり守 や屋 せい成 いち一*

はじめに

チャバネアオカメムシは果樹害虫の代表格とも言えるよく知られた重要害虫である。日本においては農作物に大打撃を与えることに加えて、ときに大量発生することから、農業害虫のみならず衛生害虫としても人々を悩ませ続けてきた。そのため以前から本種を中心にチャバネアオカメムシ類の研究が盛んに行われている。

そのような研究の中でも、種の正体の解明や学名の命名を担う分類学分野の研究はいち早く完了した。チャバネアオカメムシは今から145年も前（1874年）に英国のジョン・スコットによって日本の標本をもとに新種として発表された。その26年後（1900年）に同じく英国のウィリアム・デスタントがヒメチャバネアオカメムシを日本（詳細な地名は不明）から、さらにその63年後（1963年）に米国のハーバート・ラックスがルリカメムシを小笠原諸島から、新種として記載した。これを最後に、今日までの55年もの間、日本のチャバネアオカメムシ類について種数の増減はなく、本邦には3種のチャバネアオカメムシ類が生息していると信じられてきた。

一方で、チャバネアオカメムシの学名の使用にあたっては混乱が生じている。本種の学名を *Plautia stali* とするか、*Plautia crossota* とするか、または *Plautia crossota stali* とするか、誰もが決めかねる状態に陥ったままである。そもそもの発端は、*stali* とされる種は *crossota* とされる種と同種であるとの考えが1960年代に示されたことである。同じ種に対して二つ（以上）の学名を与えることは、学名のルールを規定する国際動物命名規約では認められておらず、原則的には先に与えられた学名を用いる決まりである。したがって、*crossota* は *stali* よりも

前に命名されたことから、チャバネアオカメムシに *crossota* の種小名が使われはじめた。

しかし、*stali* と名付けられた日本のチャバネアオカメムシ（チャバネアオカメムシの日本個体群）は、*crossota* とは形態的に少し異なるという理由から、亜種として扱うのが妥当であるとの考え方も示された。この考えに従って亜種小名まで表記すると *Plautia crossota stali* となる。

ところがこれに終わらず、日本のチャバネアオカメムシは *crossota* とはやはり別の、独立した種であると主張する者も現れ、*Plautia stali* も今に至るまで使われている所以である。チャバネアオカメムシに関する学名の三つ巴は、その混乱の端緒からすでに50年以上が経過している。

種数は増減しない傍ら、学名に混乱をきたしている日本産チャバネアオカメムシ類について、この如何ともし難い状態を打開しようと分類を見直したところ、学名の混乱以外にも、多くの問題を孕んでいることが次々に明らかになった。チャバネアオカメムシ類の分類が完了しているなどということは、思い込みに過ぎなかったのである。幸いにも、それらの問題を解決した論文がごく最近になって出版された（ISHIKAWA and MORIYA, 2019）。本稿では、日本のチャバネアオカメムシ類の最新分類を現場レベルにまで周知してもらうために、その内容をできる限りわかりやすく解説する。

本文に先立ち、野外調査にご協力いただいた沖縄県病害虫防除技術センターの安藤緑樹氏、兒玉博聖氏、宇久田理恵氏、山口綾子氏、上里卓己氏、沖縄県八重山農林水産振興センターの白玉敬子氏、国際農林水産業研究センターの小堀洋一博士、佐賀県果樹試験場の口木文孝氏、市原市の清水喜一氏（以上、ご協力いただいた当時の所属）にお礼申し上げる。

I 分類の問題とその解決

本章の内容を表-1にまとめてあるので、併わせてご覧いただきたい。

The Current Situation of Taxonomy and Nomenclature on the Japanese Species of the Stink Bug Genus *Plautia* STÅL (Hemiptera, Pentatomidae). By Tadashi ISHIKAWA and Seiichi MORIYA

(キーワード: チャバネアオカメムシ, 分類, 学名, 分布, 形態)

*現在: 茨城県つくば市